



今井賞（錯視の館賞）は一つの灯であった



筑波大学 名誉教授

椎名 健（しいな けん）

1941年生まれ。東京教育大学大学院修士課程修了。筑波大学や文教大学などで教授を歴任。日本錯視コンテスト審査員。元今井賞事務局幹事・同選考委員。専門は知覚心理学、実験心理学。著書は『錯覚の心理学』（講談社現代新書）、「人はなぜ嘘をつくのか」（ごま書房）など。

2007年に筑波大学を定年退職した私は、文教大学に勤務、2012年に2回目の定年を迎えた。最初の定年の数年前のこと、当時東北大学教授の仁平義明氏の発想で、日本で活躍する錯視研究者を讃える賞を作ろうという話が浮上。氏は筑波大学名誉教授の菊地正氏を誘い、今井四郎北海道大学名誉教授が主催した「パタン・錯覚・エラー研究会」が授与する形で、賞の名前とその意義について、今井四郎氏を説得。また、審査委員長には故野口薫日本大学教授の内諾も得ていた。私が発起人の一人として誘われたのはその直後であった。これで今井賞が誕生したのだが、次の一步が踏み出せないでいたところを、私としては珍しく、船頭役（幹事長）を買って出て、第1回の授与式を2005年9月に、YPS（Young Perception Seminar）の中で開催することができた。また、第2回からは、知覚コロキウムの最終日に時間をもらい、第7回までの授与式が挙行された。

賞の母体である研究会は、今井氏が新築されたご邸宅に誘えられたセミナールームで催された。それは、2階の一角にあり、窓からの眺望素晴らしく、床下は駐車場で、気兼ねなく跳ねたり踊ったりができた。部屋には長机と椅子が据えられ、十数名が囲んで座ってもゆったり感じるスペースである。そんな空間を自宅に持つことなど通常は夢のまた夢であろう。これは、氏のご長女夫妻が共に建

築工学博士という事情があってこそ成しえたのかもしれない。

その今井邸には2、3の建築錯視が認められた。その一つは、外堀に見られる「フェンス錯視」である。堀の並びは一直線で、敷地の自然の高低をそのまま生かしたため、上辺が水平な堀の、高低差のある部分のみは傾斜する堀で繋がれている。これを斜め外から見ると、「屏風のようにジグザグと内外に出入りする、全く同じ高さの壁」に見えるのである。仁平氏は「錯視の館」と命名、今井賞の選考規約でも、別名「錯視の館賞」と称している。

今井四郎氏は認知心理学者としては高名でも、錯視の領域ではまだ名が聞こえていなかった。実は、今井賞の創設前から氏は錯視研究にも傾注しており、筆者が「今井錯視」を拝見したのも今井賞の創設前であった。氏は水準の異なる幾何学に基づく錯視の定義と分類を提起し、独自の錯視の世界像を描き出した。その初期の錯視理論は『錯視の科学ハンドブック』（2005）の中に「今井錯視」と共に掲載されている。

今井賞は「ゆるやかな性格のもの」と規約にあるが、選考委員長と委員については、外部者に委嘱された。第1回今井賞は、故野口薫委員長の下で、大山正氏と北岡明佳氏のお二人に授与された。ところが第2回を前に、野口委員長が急逝された。急遽、次の選考委員長を大山正氏に依頼し、第

5回からは鷺見成正氏がバトンを受け継がれた。歴代授賞者は、[第2回] 今井省吾氏、藤田和生氏（比較錯視）、野口薫氏、[第3回] 野澤晨氏、鈴木光太郎氏、[第4回] 鷺見成正氏、[第5回] 田中平八氏、山上暁氏、[第6回] 苧阪良二氏、行場次朗氏、中村哲人氏（比較錯視）、[第7回] 山口真美氏、金沢創氏（幼児の発達錯視）である。

今井賞は、賞状と副賞の額のほかに、前回の受賞者がデザインした図柄で紺紬めを作り、デザイナーによる解説を付して新受賞者に贈られるというユニークな記念品が今井四郎氏のアイデアで添えられた。また、賞状のデザインは仁平義明氏の作で始まったが、第3回からは北岡明佳氏がデザインと印刷を提供されている。こうして世界に類のない賞状と記念品が今井賞の特徴となった。

錯視研究者には、今井賞が一つの灯と認知されはじめた矢先、2012年、今井四郎氏のよんどころない事情により、授賞の続行が不可能になった。せめてもの幸いは、今井四郎氏が御健在のうちに、ご自身のご意志で幕引きがなされたことである。閉じる会には、今井四郎氏のご挨拶、加えて今井賞の貢献者には、感謝状（北岡氏デザイン）と記念品を直に手渡された。

現在、今井四郎氏は奥様のご看病のかたわら、錯視の理論構築に励んでおられ、ほぼ完成したと伺っている。